第４分科会

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の視点から子どもの育ちをとらえる

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10 の姿)」を理解し、その視点から、子どもの育ちを語り合い、より良い保育実践につなげよう

ディレクター兼司会者名	野村 知子(ひかり幼稚園)
運営委員名	鈴木 孝昌(認定こども園弥富はばたき幼稚園)
話題提供園名	菅原　留美　北野　藍　北村　聖子
	小林　如花　（認定こども園梅圃幼稚園）
	加藤　貴子　堂前　扶美子（丈生神山幼稚園）
助言者名	北野 幸子　（神戸大学大学院人間発達環境学研究科 人間発達専攻　准教授）
分科会担当責任者名	窪田　裕美子（高岡第一学園附属第一幼稚園）
会場	富山電気ビル
参加人数	201 名

保育者は､「日々の保育を振り返りながら､子どもの発達や内面の理解を進め､子ども一人一人のよさや可能性等を把握し､評価･指導の改善に生かしていく事が大切である」と言われています｡

そこで、この分科会では､「10 の姿」を理解し、その姿を手掛かりとして、目の前の子どものありのままの姿を受容･傾聴し､子どもの発達と内面理解を深めていきます｡

また､子どもの姿を多面的に理解して保育に生かすためには､現時点だけでなく､発達の「時間軸」としての連続性に留意する必要があります。この研究を通して、より良い保育実践について考えていきたいと思います。

研究の手がかり

① 園における子どものあそびや生活の中で､「10 の姿」は、具体的にどのような場面で見られるのでしょうか？

② 「10 の姿」を念頭に置きながら、子ども一人一人が発達に必要な体験を積み重ねていくための環境や援助とはどのようなものでしょうか？

③ 「10 の姿」を通して捉えた子どもの実態(多面的な育ちの姿)を踏まえて、どのように指導計画の再検討を行えばよいのでしょうか？

話題提供園　福井県越前市学校法人摂取学園　丈生神山幼稚園

【研究内容】

〈研究の視点〉

・園における子どものあそびや生活の中で、「10 の姿」は、具体的にどのような場面で見られるのでしょうか？

・「10 の姿」を念頭に置きながら、子ども一人一人が発達に必要な体験を積み重ねていくための環境や援助とはどのようなものでしょうか？

〈研究の取り組み〉

①「１０の姿」を共通理解する。

②子どもの「やってみたい」を起点にした日々の姿を『ＪＫＹ(共有)ノート』に書いてみる。

③「育ちと学び」を見取るため、『１０の姿』を用いて言語化し振り返る。

④ 保育者同士で保育や見取りを語り合う。

⑤ 子どもの特性や内面を共通理解する。

⑥一人一人のさらなる育ちを引き出せるよう全員で取り組む。

【ＪＫＹノートについて】

・子どもの「やってみたい」を起点とした日々の姿等を言語化する。

（右図参照）

〈ＪＫＹノート〉

年月日	対象児	場所
タイトル		記録者
活動・遊びの様子・こどものつぶやき・保育者との会話など		
考察・子ども、保育者が何を学んだかを言語化する		

【研究結果と考察】

（１）事例から

・「育ちと学び」を見取るため、『10 の姿』を用いて言語化し振り返る。

・保育者同士で保育や見取りを語り合う。子どもの特性や内面を共通理解する。

（２）ＪＫＹノートの記録から

・言語化するのは難しかったが、記録することで振り返りができたり、保育者自身の頭の中も整理ができたりした。

・客観的に保育を振り返ることができ、自分の視野・観点がよくわかるようになった。

・他の先生からのコメントが励ましになった。自分の力不足の発見にもつながった。

（３）記録の活用と意義

・言語化していくと、職員間の共通理解が明確に自分のものになってきている。

・個々と集団を意識的に記録し、より深い幼児理解につながる。

・可視化や記録、語りの質の向上につながる。

（４）10 の姿を使ったら見えたこと

・不思議、なぜ？がたくさん感じられる環境や失敗しても大丈夫だと思える環境の大切さが見えてきた。

・年齢の積み重ねの育ちが、どのようにつながっていくかが大事である。

（５）同僚性について

・子どものことを考える際に、頼り頼られ意見を交換できる“場”があるということは、職員は勿論、子どもたちにとっても良いと思う。

・最終目標を共通認識しながら、各々の手だてがあると思うので、これからもより一層話し合いの場を大切にしながら、子どもを伸ばしていきたい。

【おわりに】

・「可視化」、「記録」「語りの質の向上」を目指し、保護者や地域に発信していきたい。

・子ども達の遊び込める「時間」や「場」を工夫する手立てを考えていきたい。

・育ちの継続を大事にするために、職員間の共通理解を深め、同僚性の“和”を大切にしたい。

・子どもたちが今何に興味を持ち、何を広げているかを少しでも理解し、共に笑い、「共感し、共有できる保育者」でありたい。

福井県　学校法人　梅圃学園　認定こども園　梅圃幼稚園

【実践研究のテーマ】

・子どもの実態を探りながら、よりよい保育計画を構築し、保育実践につなげる。

【研究の手立て】

①「１０の姿」を通して年間計画を振りかえり、子どもの姿について語り合う。

②今の子どもの実態を３～５歳児の育ちで見直す。

【実践】

＜“今”の子どもの姿を振り返り、活動内容を考える＞

エピソード①　夏野菜を育てよう！（Ｈ３１年５月）

・５月の月案を立てるために、４月の子どもたちの姿を振りかえりながら語っていたところ「落し物が多く、自分の物への愛着が薄いのかな」「友だちに対する言葉使いや態度が乱雑なのが気になるね」という点が見えてきた。５月の活動のねらいを◎色々なものに愛着がもてるような経験をしてほしい◎友だちと言葉のやりとりをしながら相手の思いに気付いていく　とし、野菜の栽培活動に目を向けることにした。

＜保育者の配慮＞

・栽培する食物を、あらかじめ保育者が決めておくのではなく、食物が体にとってどのような影響があるか、今の時期（５月）に育てられる野菜は何かを、図鑑や絵本を通して知り、自分達で育てたい食物を話し合って決めた。結果６つの野菜が候補に出て、やってみることにした。

＜考察＞

・目的や方法を共有することで、「自分たちでやりたい！」という意欲につながり、友達に自分の気持ちを伝えようとする姿が見られるなど、言葉のやりとりがよく見られた。

・自分で決めて、自分で選んで、自分でやってみることを推奨した活動。共通の目的の中で、「やりたい」「達成したい」という意欲から、言葉のやりとりが増え、お互いに伝え合う姿に繋がったのではないかと考える。

エピソード②　わくわくひろば（第２園庭）で遊ぼう（Ｈ３１年４～６月）

・それぞれが好きな遊びを見つけて楽しんでいるものの、「貸して」と言われると黙ってしまうなど、思いを言葉にして伝える姿が少ない。

・自分が“楽しい”と思える遊びや環境を用意し、遊びこんでいく中で、共通の目的を見つけ、「こうしてみよう！」と提案したり、「聞いて」と楽しかったことを伝えたりする経験を多く取り入れていけるといいのではないかと考えた。

＜保育者の配慮＞

・「情緒の安定」と「一人一人が安心感を持って、十分にやりたいことができる環境」を重視する。

・遊具の貸し借りや、譲り合い、遊びの工夫ができるように、スコップやバケツ、一輪車等の遊具はあまり出し過ぎないようにする。

＜考察＞

・遊びが継続し、発展していく中で、子ども達は「やりたいこと」を「他の友達とも共有したい」と思い、自分の思いを伝えたり、お友達の考えに耳を傾けようとしたりした。目的を共有している時、言葉による伝え合いも活発になっていると感じる。「何とかやり遂げたい」という意欲の合致が、協働する力を培う活動につながるのではないかと考える。

【研究の振り返り】

・それぞれの学年の“今”の子どもたちの姿を語り合っていたところ、感情が動く経験を重ねることで、伝えたいことが生まれ、その思いを発信したい・共有したいという思いが生まれるのではないかということに気づいた。

・“１０の姿が育つプロセス”を使い、それぞれの学年でどのような成長過程があるのかを確認し、遊び込む時間の確保、環境設定を工夫していこうという話で研修を終えた。

◎質疑応答

【丈生神山幼稚園】

Q、ＪＫＹノートをはじめたきっかけと、どのように活用されているか（司会者）

A、１０の姿を共通理解して、その上で何をしたらよいかと職員間で話し合ったところ、日々の生活の中でその日あったこと等を、会話をすることがあるが、残っていなかったので、記録をしてみようということではじまった。
負担にならないように、形式にはこだわらず、自分が思ったことや子どもの言葉を書いていった。
隣の先生に見てもらい、コメントを書いてもらうということを、次々と回していった。コメントが書かれたＪＫＹノートを振り返り次の保育に生かした。

Q、どういうところで、子どもたちの遊び込める時間と場所の確保の難しさを感じたのか
（福井県　仁愛女子短期大学附属幼稚園　嶋橋先生）

A、園の行事があると、時間の制限をしてしまう。小さい子の遊びの確保のために場所を空けてあげなければいけないことがある。等、子ども達が納得するまで遊べないことがあった。

Q、小さい地図から、大きい地図に発展していった過程（三重県　まるこ幼稚園　西岡先生）

A、小さい地図の活動はすぐに終わってしまったが、園外保育に出かけることをきっかけに、大きい地図を作っていった。保育者は幼稚園と道のみを描き、子ども達が自分の家等を描いた。

Q，３６の事例とはＪＫＹノートの枚数か。どのくらいの期間で集めたのか
（福井県　聖徳幼稚園　北條先生）

A、H３１年3月から、２・３・４・５歳児で集めた。現在も集まり続けている。

【梅圃幼稚園】

Q、６つの野菜を一緒に育てるのは難しくなかったのか
子ども達が達成感を得るための工夫は（石川県　ちよの幼稚園　丸山先生）

A、なす・かぼちゃ・枝豆・とうもろこし・きゅうり・ピーマンをプランターで育てた。
子ども達が水やりをし、生長を観察し、収穫をし、給食室に届け調理をしてもらう。
他のクラスに、今日の給食に育てた野菜が入っていることを伝えに行く。
とうもろこしはできなかった。何がいけなかったか一緒に考えた。

Q、わくわくひろばで、遊具を減らした保育者の配慮の意図と良かったことは
（長野県　南長野幼稚園　北島先生）

A、わくわく広場は年少のときから行っているので安心して遊べる場所。
言葉のやりとりを重視して、あえて遊具を減らし様子を見た。
声をかけあい遊具の貸し借りをしながら遊ぶ姿が見られた。ただ今回は、わくわく広場で十分に遊び込んだ経験のある年長だからこそできた環境設定である。

◎グループ協議の感想

・各自が持ってきた写真を見ながら１０の姿について話をした。考えることに個性があり、いろいろな学びがあった。それぞれの園の取り組みの中で様々な学びがたくさん出ていた。１つの活動の中に１０の姿が含まれていることが分かりやすかった。

・みんなで写真を見ながら話し合うことで、１つの写真でもいろいろな着眼点から１０の姿があるということが分かって良かった。

【助言者の講義】

〈これからの時代を生きる子どもたちに育みたい力〉

・変化の時代…国際化、情報化、人工知能化時代　⇒多元文化と触れ合う時代
・変化の時代、不安な時代にこそ、心の「芯」を子ども達に育む。
⇒乳幼児期の教育＝人格形成の基礎作り
・過度な期待は子どもを傷つける⇒スモールステップの期待は子どもを育てる
・過小評価されている状態があってはならない
・今からの時代は、必要性、使い方、知識の組み合わせ方、発想する力が必要
・価値…臨機応変に対応、自分と違う考え方に寛容になれる力

〈小学校以降の教育の資質・能力の３本の柱〉

① 個別の知識や技能
② 思考力、判断力、表現力等
③ 学びに向かう力、人間性等 情意、態度等に関わるもの

〈芽生えをはぐくむ乳幼児教育〉

・遊びや生活の中で体験的に芽生えをはぐくむ
・知識や技能の基礎(感じたり、気付いたり、わかったり、できるようになったり)
・思考力・判断力・表現力等の基礎(考えたり、試したり、工夫したり、表現したり)
・学びに向かう力、人間性等(心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営む)

〈改定のポイントとこれからの乳幼児教育〉

・次世代の育成ということを考えた⇒3 本の柱(小学生)に＋基礎

〈スタートカリキュラムの作成と小学校学習指導要領に準じた教育を〉

・“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導“という言葉は、小学校教育要領の総則にも、各教科にも必ず明記されるようになった。

〈連携推進へ：可視化と発信〉

① 遊びの中の育ちと学びの可視化
② 保育の醍醐味への小学校や保護者、社会への理解の促進
③ 子ども達が見直し、振り返り、共有し、共同的な学びへ
④ 保護者の保育理解、振り返り、評価
⑤ 園での同僚性づくりとチームとしての質の維持・向上
⇒10 の姿を活用しながら、子どもの姿を基軸とした保育へ
⇒前倒し教育ではなく、アプローチではなく、しっかり園生活における、豊かな経験の実施、育ち・学びの姿を伝えることが大切。

○同僚性
・保育の質を高めるには、個々の力量を持ち寄り、同僚性を高めることが大切である。
行う時間を持つことが大切である。

1
1